

岩手医科大学歯学会第38回例会抄録

日時：平成6年7月2日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階講堂

演題1. 歯根形態の年代差, 特に小臼歯歯根について

○千葉 充, 亀谷 哲也, 石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

目的：歯根の形成は歯冠萌出後、およそ4～5年程度で完成するが、その間、咀嚼運動時に、歯根に対しては、機能時の刺激として咀嚼圧が加わっている。最近増加している若年者にみられる顎骨の発育不全は咀嚼エネルギーの低下が原因していることが、指摘されているが、この事は同時に形成途上の歯根の発育にも影響していることが、考えられる。即ち、若年世代の歯根では、それより前の世代と比較して、形態的な変化を生じていることが、推測されます。

この様な観点から、抜去歯を用いて、歯根形態の世代差について検討しました。

方法及び資料：岩手医科大学歯科矯正学講座で所蔵している個体識別の明かな小臼歯269本を用いた。計測には1/100mmの読み取り可能なデジタルノギスを用い、歯根の長径と幅径について行った。計測に際しては、歯根吸収の認められるものは、除いた。また、歯根完成の時期を考慮して、第一小臼歯は15歳以上、第二小臼歯は16歳以上のものを用いた。計測結果は、昭和12年以前生まれ（A群）と、昭和32年から47年（B群）の2世代間で比較した。

結果及び考察：歯根長では、上顎の第一小臼歯と第二小臼歯、下顎の第一小臼歯では、1mm以上の差が認められ、特に下顎の第一、二小臼歯については、統計的に有意の差を認めた。また、歯根幅径では、AB両群の差は、部位によって異なっており、歯頸部直下ほどB群が大きく、特に上下顎第二小臼歯で0.5mm以上の差が見られました。また、根尖に近いほど、その差は小さくなり、特に上下顎第二小臼歯の根尖側1/4ではA群の方が、大きい値を示した。歯根長の変化については、B群の歯根長は、A群の者より短い傾向が見られた。歯根幅径の変化については、歯頸部直下の歯根幅径は、歯冠幅径の影響を受けてB群の方がA群より大きい、根尖部1/4では逆に、A群の方が、

大きい傾向が見られた。以上のことから、若年世代の歯根は短くなる傾向があることが、認められた。

演題2. 乳歯列の永久歯列形成に与える影響について

○佐藤 輝子, 野坂久美子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

目的：永久歯列の不正咬合への影響は、乳歯列時の生理的歯間空隙の有無のみならず、歯列弓の大きさや、歯冠の大きさにおいても、何らかの関連性があるものと考えられる。そこで今回、すでに永久歯列が完成した症例について、その乳歯列時の歯冠の大きさ、ならびに歯列弓の大きさを検索することで、乳歯列時から永久歯列の将来を予測する手段を得るために、本研究を行った。

資料ならびに研究方法：対象とした資料は、骨格的に異常を伴わず、第2大臼歯まで萌出完了した92例の乳歯列時（初診時）の平行模型である。研究方法は、各症例を永久歯列時の状態から正常群51例と叢生群41例の2つに分類、またさらに男女別に分類（正常群は、男子18例女子33例、叢生群は男子19例女子22例）し、各症例の乳歯列時の平行模型の歯冠幅径ならびに歯列弓幅径、歯列弓長径、歯列弓高について計測を行った。

結果ならびに考察：歯冠幅径では、女子においては、叢生群が、上顎では犬歯以外全ての歯種で、下顎では前歯において、正常群より有意に大きな値を示し、男子においては、正常群が叢生群や小野ならびに小児歯科学会の平均値より小さな値を示したが、有意差はなかった。歯列弓幅径では、男子においては、叢生群が上顎E-E間、下顎CL-CL間とD-D間で、有意に正常群より小さく、また、EL-EL間以外、小野ならびに小児歯科学会の平均値よりも小さな値を示した。しかし、女子では、正常群、叢生群両者とも、近似した値をとり、EL-EL間以外、小児歯科学会の平均値と同様な傾向を示した。さらに、歯冠幅径において、女子では、男子と比較して、乳歯と後継永久歯との間に

高い相関性が得られた。これらのデータは、今後、将来の永久歯列の状態を予測する参考になりえるものと思われた。

演題3. 平成5年度解剖学実習において遭遇した眼窩下孔副孔の一例

○寺田 裕, 鶴田 博文, 相場 隆広*
 鮎瀬 淳*, 荒 光毅*, 藤村 朗**
 野坂洋一郎**

岩手医科大学歯学部4年

*岩手医科大学歯学部3年

**岩手医科大学歯学部 口腔解剖学第一講座

平成5年度歯学部解剖学実習において、眼窩下孔下内方に副孔を有する一例に遭遇した。実習の最終段階において発見したため、孔内を走行する神経が顔面に出現した後の分布は不明であったが、骨内の走行を追及することができた。

本症例は平成5年度歯学部解剖学実習で用いた41体82側中1側に認められた。副孔の出口はすでに剖出が終了しており、正確な計測は不可能であったが、本来の眼窩下孔とほぼ同じ大きさであった。末梢から中枢に向かって、副孔で認められた神経の剖出を進めると、副孔内側縁から9.8mmのところ下方に向かう分枝が上顎中切歯に入り込んでいた。さらに中枢側に剖出を続けると、上顎骨体内側壁内をほぼ水平に後方に向かい、後壁でやや下方に向きを変えながら骨壁を貫き、上顎結節から翼口蓋窩に出て翼口蓋神経節の下方5.6mmの大口蓋神経に合流していた。すなわち、大口蓋神経の分枝が上顎結節から上顎骨内に侵入し、上顎骨体内側壁を前走し、上顎中切歯および顔面に分布していた。過去の報告では、日本人の眼窩下孔副孔の出現率は10～30%と高いが、そのほとんどは眼窩下管内、または眼窩下溝での分岐した眼窩下神経の枝の通路となっているようである。今回報告した、大口蓋神経の分枝が上顎中切歯に分布したという報告は、演者らが涉猟したかぎり見当たらない。本例の神経は、分岐型から、大口蓋神経の分枝が上顎中切歯に分布したという見方や、上顎神経の後上歯槽枝の分岐および走行異常という見方もあるが、上顎中切歯への分布から、前上歯槽枝の走行異常と考えるのが妥当と考えられた。臨床的に、眼窩下孔伝達麻酔の際、上顎前歯部に知覚が残存することがまれにおこり、切歯管内を走行する鼻口蓋神経の分布が考えられているが、この神経

は上顎中切歯に分布しないことが報告されており、本症例のような異常走行を示す神経分布が原因とも考えられる。

演題4. 試験成績と学生による講義の評価

○佐藤 方信

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、大学の自己点検と自己評価の問題が取り上げられ、大学教員に研究能力のほか、教育能力の向上の重要性が要請されてきた。教育は教師の側とこれを受ける学生側の複雑な要因によってその効率が大きく左右される。学生の成績の評価は通常試験の成績により判定されているが、これまで教師が評価される事はなかった。

演者は自分の講義が学生にどう理解、評価されているかを知る目的で学生の試験成績を講義時の着席位置と欠席回数との関連および講義に対する学生の評価などについて検討した。

対象・方法：歯学部4年生の病理学の講義を対象とした。講義の際に講義室の机椅子の配置を記した着席表を回覧し、各自着席している椅子の位置に自分の学籍番号を記入することで出欠をとり、8割以上着席している位置をその学生の着席位置とした。これらの着席位置に基づき前4列をA群、中3列をM群、後3列をP群、そして位置の定まらない学生をN群とした。欠席回数と試験成績の関連の検討は47回の講義回数の中、全て出席した群(I)、1～4回欠席群(II)、5～9回欠席群(III)、10～14回欠席群(IV)の4群に分けて行った。試験成績は3回の試験の平均点を用いた。講義の評価は現在東海大学で使っている17評価項目について行い、記入にあたって学生には着席しているブロックのみ記入させ、氏名は記入させなかった。

結果：試験の成績(SD)はA群(38名)が72.7点(10.7)、M群(36名)が67.5点(8.4)、P群(11名)が65.3点(7.0)であり、N群(10名)は66.6点(7.9)と、概して悪く、留年者の半数(6名)はN群の学生であった。欠席回数と試験成績(SD)はI群(20名)が72.5点(11.3)、II群(39名)が70.2点(9.6)、III群(27名)が67.1点(7.5)、IV群(9名)が65.3点(8.0)で欠席回数が多くなるに従い試験の成績が悪い傾向が示唆された。講義に対する評価ではMおよびP群の学生に比較してA群の学生による評価が厳しかった。また、学生の自己評価ではP群の学生が自分自身に甘い